

国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注 (7)

著者	劉 玲
雑誌名	筑波日本語研究
巻	23
ページ	(1)-(26)
発行年	2019-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00154662

国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(7)

劉玲

本稿は、中田祝夫編抄物大系(勉強社1977年)所収の、

国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』(影印本)を底本として使用する。当該抄物の成立、資料的価値については、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注(1)、「筑波大学人文社会研究科『筑波日本語研究』第17号」を参照されたい。本稿では、前記拙稿、及び「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注(2)、「同18号」、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注(3)、「同19号」、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注(4)、「同20号」、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注(5)、「同21号」と「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』」翻刻と校注(6)、「同22号」に引き続き、主として、抄中に引かれた漢籍及び集成している五山僧の諸家に注目し、それをできる限り明記して、本抄物を解説する際の手がかりになるようつとめる。なお、翻刻・校注上の諸事項については、前記の諸稿

に詳しいが、要点また前記の諸稿において説明していない事項について記しておく。

一 翻刻の範囲を底本の二二三頁から二四四頁とする。
 一 基本的に、原典テキストが写された方形の枠線の後に置かれている抄文の部分を翻刻の対象とする。若干、その枠線内及び枠線外の周辺に書き込まれた小文字書きの抄文が存在するが、影印本で判読しにくい箇所が多いため、本稿では翻刻しない。

一 漢籍の引用が見られる場合、その書名または篇目名や章・節の名、作者名に、線で記す。例えば「補云 此詩有金陵字 按才子傳 長卿初為轉運使判官 知淮西岳鄂時作乎」(二二三6)、「沅湘——一義云 柳子厚詩云 欲採蘋花不自由之意也 去舟人ヲ 送ニセメテ 蘋ヲ 採テ ナリトモ」(二三一13)、「一義云 望去舟ハ ■群玉 黃陵席詩 輕舟短棹唱歌去之意也」(二三一15)など。少数、漢籍の本文が引かれているが、書名または作者名などの情報はいつさい記載していないと見られる場合がある。このような場合について、今回、一々原本で確認するに至っていないが、『国学宝

典』 網略版 (<http://www.gxbd.com/>)、中央研究院漢籍電子文獻瀚典全文檢索系統 (<http://hanji.sinica.edu.tw/>)、『中国基本古籍庫』(黄山書社出版)を檢索資料として、これらの資料にほぼ同様な本文が檢索できた場合に、「一義 昔日紅袖今日無之 其着紅袖人之魂 又化蝶至此耶 應有春魂化為燕 年々飛入未央栖之謂也」(二三七 10)とか、「雪樵本曰 明皇楊妃 唐楊妃夢与明皇遊山驪 至興元驛 方对食 後宮忽告火發 倉卒出驛五俟……」(二四三 6)とかのように、引用の最初の部分に――で記す。また、【】内において関連の情報を補うことがある。なお、書名などの記し方については、拙稿「『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況」(筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』55号)において検討しており、参照されたい。

一 前記の檢索資料と本抄物の引用と比較して、文字や行文の上相違する箇所が見られる。例えば、王建の詩の引用と見られる「又王建詩云 一院落花無名醉」(二三六 21)について、『国学宝典』(『全唐詩』卷 0300 王建「李处士故居」詩)において「一院落花無客醉」とあり、「名」と「客」の相違が見られる。「漢書 高祖紀下」から引かれる「上居南宮……吾属亡患矣」(二二四)において、「以天下為不足用偏封」(本抄物)と見られるが、『国学宝典』(百衲本『漢書』高帝紀第一下)に

は「用」字が見えず、「以天下為不足偏封」とあるように異なっている。また、これらのうち、誤記や誤植だるところがありうるが、当時に引かれる漢籍の底本がまだ明からにしていなかったため、今回特に改めず、底本の通りに翻刻する。

一 幻雲抄に集成している五山僧の諸家の説については、次のように――線で記す。例えば、「雪本曰 五渡云々一句言 崧山五渡溪边 躑躅映山 李渤在此中 想可聞鐘陪講筵也」(三〇15)においては「五渡云々」より以降は「雪本曰」(蘭坡景菑の説)であり、「草暖――曉風云 此篇以屈原自比 詩以比離騷經 第一句言以草暖沙長喻小人得处……」(二二二 11)においては「此篇以屈原自比」より以降は「曉風云」(万里集九の説)である。また、「補講云 聽雨ハ 水緑蘋香人自愁之句ハ 言讒不可陳处也トテ 一嘯而已」(二二一 8)については、「水緑蘋香人自愁之句ハ」より以降はおそらく「補講云」(横川景三の説)において「聽雨」(心田清播の説)が引かれていると見られるような箇所について、「補講云」並びに「聽雨」の両方に――線を引く。ほかに、「望去舟 或云 触目意也 時有去舟向巴丘也 或云 送友人舟也」(二二二 17)とあるように、「或云」は誰の説か不明だが、同じく――線を引く。「或曰」や「或説(云)」と記された場合について同様に処理する。

- 一 漢字については、底本の形態を重んじ、異体(略体・俗体を含む)の文字をできるかぎりそのまま写し、また、末尾の表1にまとめる。少数、誤読されやすいものについては、随時に示すことがある。例えば、「【卅(三十)】(二二四13)」「や【俛(俯)】(二二九8)」「など。若干、□で示し、【】内において【 $\dot{\text{シ}}^* \text{木}$ (流)】(二三五6)・【 $\text{米}^* \text{口}$ 】(幽)】(二三〇16)・【 $\text{尺}^* \text{日}$ (書)】(二二五18)・【 $\text{木}^* \text{十}^* \text{友}$ (愛)】(二二四8)・【 $\text{言}^* \text{云}^* \text{十}^* \text{母}$ (講)】(二二四21)のように示す場合があり、*符号はその字または偏旁冠脚を左右でまたは内外で組み合わせた文字を、+符号はその字または偏旁冠脚を上下で組み合わせた文字を意味する。これらについて、初出以降はすべて通行体にあため、また、末尾の表2にその通行体をまとめる。その他、「年代大隔」(二二三5)・「衰病シテ」(二二五2)などのように、工夫しても再現できない場合は通行体のみで記すが、一々説明せず、末尾の表3にまとめる。
- 一 小文字で二行書きにしてある箇所が少数あり、「 〃 」印で改行を示す。例えば、「暎風云 事林廣記續集 第七多部本也/少部無也 花酒令 花酒左手把花/右手指酒 云々」(二二七3)とあるのは、それぞれは「少」「右」の二字から改行している。
- 一 仮名については、「子」を「ネ」に改めず、底本通り

- に写す。合字では、「 ヱ 」を「シテ」に、「 ニ 」を「コト」に改める。
- 一 踊り字については、漢字一つと仮名一つの場合は、底本に従い、それぞれは「々」と「、」で写す。例えば、「云々」(二三三10)、「往々」(二二四7)、「サル、」(二二四16)、「ナリカ、ル」(二二四25)など。仮名二つ以上の場合または漢字仮名まじり書きで二つ以上の場合には、「 〃 」を使い、「暖ニ ユル 〃 トナリテ」(二二四5)や「ヤウ 〃 事コソ ヨサウナレ」(二二四22)のように写す。
- 一 振り仮名はそのまま写す。
- 一 濁点はそのまま写す。
- 一 返り点、一・二点と上・中・下点は、「レ」、「一」、「上」などのように「 レ 」に入れて記す。
- 一 転倒符、挿入符、書入れ指示については再現できず、【】内において説明する。
- 一 見せ消については■で示し、【】内において説明することがある。
- 一 その他
- ・ 頁数は底本のそれに従い、漢数字で記す。また、あらたにアラビア数字で行数を記す。
 - ・ 句読点は特につけず、底本の朱点により一文字分をあけることとする。なお、破損や墨汚れ、または不鮮

明であるため、判明できない場合に、校注者の判断による。

・ 破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判読できない場合に、□で示す。推測されるものがあれば、それを□の中に入れる。

・ その他の説明事項があれば、【】内において記す。

二二三

一 桃云 寄レ別ル、ニ 二二—— 二二ト ヨムカ ワルサ

ウナソ 有送別 有贈別 有留別也 送別ハ 送行也

贈別モ 贈二行人二也 物ヲ【この行まで「寄別朱

拾遺」原典テキストが置かれている】

二 少ソエテ ヲクル坎 留別ハ 行人カ ヲキヤシナイ

二 作テ 別ル、ソ 寄別モ 送別ノ心テ アラウン

サラウ時ハ 寄二

三 別ス—— 二二ト ヨマウン 村云 寄別ルノ点 可

也 續翠云 寄別ハ 留別ノ 類也

四 或云 朱拾遺乃朱可久也 朱慶餘 字可久 幻謂

大非也 長卿 開元二十一年及第也 可久 敬宗【「大」

字見せ消】

五 宝曆二年及第也 年代大隔 况才子傳第六 可久傳無

六 補云 此詩有金陵字 按才子傳 長卿初為轉運使判官

知淮西岳鄂時作乎 又觀察使吳仲

七 孺■誣奏 非罪繫姑蘇獄■時作乎 又貶潘州南巴尉

時作乎【「姑」字は「始」に見える】【「姑」左傍より

書き込み、「吳都賦注 吳都者 蘇州是也 後漢末 孫

權乃都於建業 亦別號吳 養私義」とある】

八 幻按 方輿勝覽 目錄 建康府 古昇州 本路安撫兼

留守 本路轉運淮西總領置司 又第十四 建康志

九 序 坐鎮江淮 以為陪都 云々 江陵在建康 然則此

詩 長卿知淮西時作也

二二四

一 唐詩正音 刘文房發越州赴潤州使院 留別鮑侍御云

對水看山別離 孤舟日暮行遲 江北江南春■【「早」字

見せ消、右傍に「草」。「春草」にすべき】

二 獨向金陵去時 此詩云 發金陵 盖指潤州乎

三 天書—— 續翠云 言ハ 吾□ナル者タニモ 被召問

君モ 必可被召也 此詩金陵作坎 杜詩 聖朝無弃物

老病【□「木+羨」(様)】

四 獨成翁之心也 天子雖召我 々病不能行 實不幸也

江海—— 他年ハ 病ニサエラレテ 不上洛ニ 今年ハ

病

五 漸瘥テ 暖ニ ユル／＼ト ナリテ 天□モ 遍

ホトニ 長卿ハ 先ツ 一□ニテ 發金陵 赴京也

行人一〇八 長「天〇」、「田十心」(恩)【二〇、「馬

*奇」(騎)】

〇 卿自云也 吾タニモ ノホラハ 朱ワ 心安思食メセ

必可被召也 補云 如統翠 則落句有漢高封雍齒之語

勢

ㄱ 也 漢書高祖紀下 上居南宮 從二復道ノ上二

見二諸將往々耦語スルモノ 二 以問張良 曰 陛下

与二此屬 二 共取天下 今二

為天子 而所レ封 皆故人所ナリ 「レ」〇 所誅 皆

平生仇怨 今運軍吏計「レ」功 以天下為不「レ」足二

用徧封二 而恐以過 一 運 右傍にヒ、取るべきで

ある。「今軍吏計功」にすべき【 恐 字見せ消】

【 〇「木十友」(愛)】

9 失及コトヲ 「レ」誅 故相聚謀反耳 上曰 為シト之奈

何 良曰 取「下」上素ヨリ所「レ」不「レ」快 計群臣

共知最甚者一人「上」 先封以示二群臣

10 三月 上置酒 封雍齒因趣 丞相 急〇功行封

罷酒 群臣皆喜曰 雍齒スラ且俟タリ 吾属亡患矣【二

十之」(定)】

二 桃云 天書 聖朝無棄物 老病独成翁 トテ 天

書ヲ 以テ 辱ク 滄浪ニ 流落シテ 居タル 逐君

ヲ 召トモ 不幸

12 ニテ 〇ノホラヌ サルホトニ 何トシテモ ノホ

ライテト 思テ 幾度モ 路マテハ出 〇スレト

モ 違例ノ 変ナレハ カナワヌソ 病テ未「レ」能ハ

13 引文選卅四 枚乗七發云 楚太子有疾 而吳客往問

之 云々 太子曰 僕病未能 云々 又文選廿八 灵

運放歌行云【卅(三十)】

14 今君有テカ 「レ」何ノ疾 臨テ 「レ」路ニ独遲下廻スル 注

君謂被放者 疾患也 遲廻 不行兒 若逢名君 則無

患 當今〇去 何不【 〇「十友」(宜)】

15 行之有也 言ハ 病カ未「レ」癒ホトニ ノホラウトテ

臨岐トモ カナワヌソ

16 江海 〇云 大赦天下 是ホト 偏頗モ ナク

トコノ ハテモ 大赦天下テ 逐君ヲ 召〇 サル、

恩澤ノ 四海ニ 及【 〇云、「木十兆」(桃)】【 召〇、

「不*」(還)】

17 叟ハ 如二春ノ遍二万國ニ 二 恩澤深ソ 欲

字 面白ソ ナリカ、ル ヲリフシ 我ハ 病テ 召

ニモ 不癒ホトニ 拾遺一人 發二金

18 陵二 可「レ」羨者也 是ハ 東漸義也

19 漁菴云 滄浪客 指朱也 我欲シテ 「レ」送「レ」朱

雖「レ」岐臨以病 不「レ」能二面別二也 故作詩寄

之【 「雖」 「岐」間挿入符あり、「臨」右傍に転倒符あ

る。「雖臨岐」にすべき】

20 黙云 一之句 凡言逐臣 二之句 刘自言也 托病

不召者 怨而怒 忠臣之故也 四之句 朱一人赴召也

21 天書——村 文安元年□云 臣ノ身トシテ 君ニハ

罪ヲ 販セヌ事 チヤホトニ 孔子モ 以微罪去魯

云々 此詩ノ意モ 君ノ【□「言*云+付」(講)】

22 不召 ニテワナイ 我病ホトニ 不赴京也 江海—

—ヤウ／＼ 事コソ ヨサウナレ 先ツ 叟始ニ 朱

カ 一騎ノホル 如□「春遍」□「一」 江湖逐客モ

二二五

一 尽可召帰也 一二句 山谷十四 病赴荆江亭即叟詩

傳聞有意用□側 病著不能朝日辺【□「米*」(幽)】

2 又 文明中村講云 朱召「帰意」不可也 刘召「販也

義同□「統翠」□

3 行人 或云 行人乃使者也 礼記 大行人 小行人

是也 行一人ハ傳□「天書」□「一」 召□「長卿」

□「一」 々々病テ不「レ」超「レ」召 唯行人一騎

4 帰也 可惜別也 村云 此義非也 或云 為使者也

又非也【「也」「可」間に挿入符あり、右傍に「實」。

「實可惜別也」にすべき】□「云」「為」間に挿入符あ

り、右傍に「朱」。「或云 朱為使者也」にすべき】

5 天書——村義ニ 此詩ヲハ 朱拾遺カ 京へ 上ルニ

読マルレトモ 刘長卿上ルアイタ 寄「別」□「朱—

—」□「トヨムカ 好也 サルホトニ

6 公方ヨリ 詔書ニテ 遠國ノ 江湖ニ 流落シテ イ

タル逐客ヲ 召サル、ホトニ 度々 サラハ マカリ

上ラント 路マテ 臨メ

7 トモ 衰病シテ 無□「料簡」□「一」 雖然此ノ 江海ノ

茫々ト 遠キマテ 柳カ 詩ニモ 云如ク 詔書ハ

逐陽和至テ 四海君恩

8 遍ホトニ 辱サニ 我カ 一騎マテ 金陵ヲ 發シテ

京エコソ 上リサウヘト 寄「別」□「朱—」□「一」也

9 ノ「使」ト云モ 甚非也 此時ハ 行人ハ 刘長卿也

柳詩 本集四十二日 詔書許逐「レ」陽和至 驛路開花

処々新 對考之

10 病ウ「レ」不「レ」能之点也 漢書 病ハ愁也 言常雖

「レ」送□「二」赴「レ」京ニ之人ヲ「一」 愁□「二」我カ不

「レ」□「二」上「レ」京也 非疾也 毛鈞 病 憂也 患也

此義非也

二 病未能 文選 三十四載 枚乘七發八首 其中五首末

句 各有太子曰僕病未「レ」能シ也之八字 可考 言太

12 子病 不能隨客之所諫也 文選卅五 載張景陽七命

八首 其中六首末句 各有余病未能也之語 盖効

13 七發軔者也

14 張楷和 和唐詩正音第五 寄別朱拾遺云 白首功名

嗟我老 青山婦記許誰 孤舟明日天涯望 一道秦関入

灞陵【「誰」「孤」間に挿入符あり、右傍に「能」。「許

誰能」にすべき】

15 嚴子安題無別字 養按 一本有別字

16 □本日 天書云々 全篇言 天子今召逐臣 我亦雖

臨岐 病故不赴召 故朱拾遺一騎先發金陵也 行人

盖礼記 大【□「樵+」】(樵)】

17 行人 小行人之義也 又或謂 第二之義 乃長卿未

及天書之召 雖然恩澤今欲遍江海茫茫之地 爰

18 見行人之發 不甚感 可知焉 第三之句之義 柳詩

詔□云々処々新之義也【□「尺+日」(書)】

19 和云 春風強直滄洲客 天府論才得異能 一自排雲

称献納 應無閑□到江陵 子安【□「ヒ+夕」(夢)】

二二六

1 張道士 曉風云 道士 有五種 一ニハ天真道士 二ニハ

ハ神仙道士 三ニハ山居道士 四ニハ出家道士 五ニハ

在家道士

2 本集題 在剡溪不逢道士也

3 才子傳卷之三 秦系 字公緒 會稽人 天宝末 避乱

剡溪 自称東海釣客 北都留守薛兼訓奏為倉

4 曹參軍 不就 客泉州 南安九日山中有大松百餘章

俗傳東晋所植 系結□其上 穴石為研 注【□「尸+戸」

(盧)】

5 老子 弥年不出 云々 与刘長卿韋應物善 多以詩相

贈答 權德輿曰 長卿自以為五言長城 系

6 用徧師攻之 雖老益壯 年八十餘卒 新唐書

列傳一百二十一 隱逸傳載系

7 盤石——道士之所居 以盤石為座 以垂蘿為墻 別不

宮室家也 盖佛者 在山林樹下修行之類也 只是家^{ソレヲカ}

8 五枝花 或云 道家以草花綉蒲團也 愚謂 盤石垂蘿

為家 則豈用綉蒲團乎

9 本草木部十二卷 帝休主不愁 帶之愁自銷矣 生少室

嵩山

二二七

1 山海經曰 少室山有木 名帝休 枝五衢 黃花黑實

服之不愁 今嵩山應有此木 未識 固可求之 亦如萱

草之忘憂也

2 千金方 五枝花 喻五臟也

3 曉風云 事林廣記續集 第七多部本也/少部無也 花酒令

花酒 左手把花/右手指酒 云々 十朵五枝花注以手伸五指反覆

應十朵 亦舒五指 應五指 仍旧指花

4 梅謂 五枝花三字 證耳 於詩無益 打坐者 禪家者 坐禪也 五枝花者 公案 柏樹子之類也

5 或云 五枝花 東坡詩 所謂烟蘿子也 烟蘿子即凶師也 五臟六腑諸脈血道之凶也 掛此凶於壁間 見盖道【「見」「盖」間に挿入符あり、右傍に「之」。「見之」にすべき】

6 土觀法未熟也 少抑道士也 本集題云 在剡溪 不逢道士 然則雖不逢之 想是平居如此乎 猶字抑之也 一義

7 云 秦系注老子經 嗜道家学 豈抑張道士哉 言秦系過張山居 子細見所掛之五臟凶也 全篇有羨張之意也

8 曉風 梅謂 叟林廣記別集下少部也 多部^{ニハ}／綱集四卷也 修真部云 内視迎氣 真人曰 外縁□屏 須守五神 黄帝内視【□「リ*无（既）】

9 法 存思食 令見五臟 有如垂磬 了々分明 云々 由是觀之 道之道家打坐法 見五臟之五色 号五枝花 10 坎 又五枝花 用季昌注 可也 天隱注 玉室山云 々 此注非也 五衢非五枝 雖然 五臟之區別 比花

五衢 或比花五枝 熟 11 亦可坎 五衢 五葉也 玉字 或作王 或作石 未知孰是

12 曉風云 旧抄 本集題云 在剡溪不逢道士 梅取此 說 第一句 不逢張道士 唯有盤石垂蘿而已 不可离

此山中 第二句 13 盤石垂蘿之外 無餘物 秦系不逢道士 屢回首而猶 欲看其道家打坐凶 々々々亦無之 言欲看五枝

14 花 々々々亦無之 或云 第二句属道士 言秦系雖 謁道士 々々不相揖 而只自回首 子細看打坐五枝花

15 凶 道士離世俗之礼数 只神仙導氣打坐而已 或説 云 不逢道士 而看五枝花打坐凶而已 此説亦 16 通 但無滋味 梅謂 雖不逢道士 盤石垂蘿之体 回 猶如看【三】道士儼然為^ナスラ 【二】五枝花之打坐^ヲ

【一】猶字 猶如【一】道「字見せ消、右傍に「首」。「回 首」にすべき】 17 二字之義可也 幻謂 此義不可也

18 回頭——村云 道家ノ觀ヲハ 皆透過シテ 了畢ス レトモ 猶ヲモ 慕テ 凶ニ写シテ ヲイタ 五枝花 ヲ 看テ イタン

19 村云 猶 看字ハ 花ヲ 承テ 云ヘトモ 心ハ 觀法ヲ スルヲ 云ソ 桃抄云 五枝花ハ 古今不審 スレトモ 只ヤスク 心得ヘ

20 タカ ヲイソ 密宗ノ 觀法ニモ 或八葉蓮花ト 觀シ 或又心月輪上ニ 坐スト 觀ス 浄土宗ハ 日 相ヲ 觀シ 宝樹ヲ

21 觀スル 叟アリ 其様ニ 道家ニモ 五枝花ヲ 觀

シテ 打坐也 鍊形ノ 叟ニ 離花坎□ナント、云
事アレハ サモアランソ 【□「葢十木」(蕊)】

二二八

一 特ニ 増注ニ 道家打坐事ト アル上ハ 疑モ ナイ
ソ 見神仙傳云 図カ アツテ行ト「レ」世ニ アル
ホトニ 異論モナ

二 イソ ナニサマ 坐觀ナリ 言ハ 此道士ハ 樹下石
上ニ 居テ 行^{オコナ}ウトハ 云ヘトモ マタ 修行ヲハ
不忘ナリソ 活脱ノ 人テハ

三 ナイソ 回頭ハ 坐禪ヲ スルナリソ 此義ハ チツ
ト イヤチャソ 坐禪スルトテ 回頭ハ ナント ヤ
ランシタソ 能争寛ノ

四 人チャカ マタモ 五枝花ノ 觀法ヲ スルト 云心
坎

五 松間——辟穀導引シテ 人間ノ 烟火テ シタ物ヲハ
不食ソ 霞ヲ 為□コソ 居ラル、ラウソ 【□「人十白十
八」(食)】

六 五枝花 或云 大集經云 何具足 云何遠離 言遠離
者 遠離五盖 言具足者 具足五枝 所謂覺觀喜安定
七 云 第二禪亦離五事 具足五枝 一者念 二者捨 三
者惠 四者安 五者定 入第四禪 云々 盖道家者

所修之

8 法 亦如吾佛家者乎 五衢者 麥之双頭 曰兩

岐 五一モ 五マタニ有枝也

9 樵講曰 乾坤清意集云 五枝花 五蔵也 近キ醫書也

麥穂兩歧 謂一莖兩穂 勻府

10 雪本曰 盤石云々二句 言秦系到「二」張道士之居

「一」 則盤石為「レ」座 垂蘿為家 以觀「二」所「レ」畫

五枝花「二」也 案「二」千金「方」云「二」云「二」羽*戈(翼)

二 五蔵如五色花 故醫術家画五蔵之精 以對之 五枝

花 恐言之乎 猶看二字属秦系 則可乎 何則在

12 在剡溪不逢道士之題并案 無其人可視焉 起赴飯■

途 回頭猶看打坐五觀之図也

13 和云 五色雲城仙子家 巢雲松下落金花 石壇雨過

灵芝老 夜半東窓見曉霞 子安

二二九

一 李渤 風云 新唐書列傳四十二并十七史列傳二十四云

李渤 字潛之 刻志於字 与仲兄涉偕隱廬山 久之

更 徙少室 云々 才子傳 李涉傳云 渤之仲兄也 勝覽

十七 南康軍 白鹿書院 注 唐李渤与兄涉俱隱於此

3 翰墨全書 氏族部 李渤与兄涉俱隱南康山中 排韵李

渤傳 与兄涉俱隱南康山中 履歷 李

4 涉 **李渤之兄** 此注 独以渤為 以涉為弟 恐非坎

古注引戴延之西征記 今天隱注本 削去六字 有深意乎【「為」「以」間に挿入符あり、右傍に「兄」。「以渤為兄」にすべき】

5 文選十六 潘安仁懷旧賦中 李善 嵩高注 引戴延之

西征記 云々 然則李渤以前之書乎 豈載渤事哉

6 編年通論卷第二十一 帰宗智常禪師 目有重瞳 遂用

菓手按摩 久而目皆俱赤 世號拭眼帰宗 江州

7 刺史李渤問曰 教中謂 須弥納芥子 渤則不疑 芥子

納須弥 莫是妄談否 師云 人傳史君讀万卷書是

8 否 渤曰 然 ■師曰 摩頂至踵如椰子大 万卷書向

什麼処着 渤俛首而已 又問 一大藏教明得什麼辺事

【「則」字見せ消】【俛(俯)】

9 師拳拳示之 云 會广 渤云 不會 師云 言箇措大

拳頭也不識 渤云 請師指示 師曰 會則途中受用

不會則世諦流布【「會广」、「广(應)】】【「言」は

「這」の略か】

10 躑躅花 南中花多紅赤 亦彼方之色也 唯躑躅為勝

嶺北時有 不如南之繁多也 山谷間悉生 二月發時

11 照耀如火 月餘不歇 出嶺南異物志

12 韓文四 三月嵩少 ■步メハ 躑躅紅千層 注 羊見

之則分散 故名羊躑躅 韋蘇州集第四 送黎六郎赴陽

【「室」字見せ消】

13 翟少府詩云 試吏向崧陽 春山躑躅芳 **湘江摘藁**

第一 經賈似道墓詩 木綿菴下鶴鷗雨 附子岡頭躑躅

紅

14 躑躅 **太平廣記**六十八 寶曆中 有封涉孝廉者 居

于少室 云々 **書堂**之畔 景象可窺 泉石清寒 桂蘭

雅澹

一三〇

1 戲猿每竊其庭果 唳鶴頻拓於澗松 虚籟時吟 織埃昼

間シクナリ 烟鎖管篁之翠節 露滋躑躅之紅葩 云々【「拓」

右傍より書き込み「取也 拾也」とある】

2 續翠云 李渤未出山以前作坎 五渡——言 面白処ニ

イタ 者カナ 殊ニ 春ナレハ 一段可愛也 人間へ

不出トモ **應**

3 好也 一之句見也 色也 一年之春也 二句 □也

□也 一日之中也 斎後講經也 春山——言一二之句

所謂ノ 外ニモ【「二」句間に挿入符あり、右傍に

「之」。「二之句」にすべき】【□也 □也】、「門

*夕(聞)、「士+巴」(声)】

4 面白処アルヘモ 是ハ羨ム 心アル也 己ホト 面白

ホトニ 出テ タムナイト 云心也 処々字ニテ 一

二句ヲ アラワス也 三十六峰ノ外ニモ 面白処コン

アルラン

5 淵云 処々字 結前生後也 五渡溪字 起幾峰字也

6 村云 始ノ講 春山——春ニナレハ 無隙也 三十六

峰ニ 遊ホトニ 一日モ ヤワヤ 家ニ 居ル叟ハ
アル 又張カ 渤カ処へ イケハ

7 一日モ 不居ホトニ 推量スルニ 三十六峯ヲ 見ル
ホトニ 不在家坎 一日ニ 一峯ツ、 見トモ 三十
日ニハ 可餘也

8 陳後山詩 四百菴寮一歲中 注 刘氏家南康廬山之
山有三百六十菴 詩意謂 日遊一菴 足了一歲 欲其
徧歴叢林也 【「之」「山」間に挿入符あり、右傍に「下」。
「廬山之下」にすべき】

9 補云 第二句 言渤嗜禪也 又号少室山人者 慕蘭達

磨乎 行^ユイテカハ 應好之三点也 除却五渡与寺 更有
三十六峯 【「行」左傍に「ユク／＼」とある】

10 不知看花到幾峰 漁菴云 到幾峯者 不倒也 五渡
嵩陽寺 其境佳 而終日留連 其餘不倒幾峰也 此義

無用歎

11 五渡 風云 一義 第一句 言躑躅開時 尋渤不逢

籍恨之 第二句 言於嵩寺講席 尋渤 又不逢 尤恨
之

12 第三四 言不逢之 故寄此詩 述数日相尋之事 即

今寄此詩時 亦必可遊山 三十六峰 其所遊之多也

13 嵩陽寺ノ——ノ鐘 談義ノ鐘也 春山——テシ

「レ」ル 一月—「レ」—「アルラン」【二】——カ【二】言ハ
嵩山ニハ 有卅六峯間 一月ニ 一々ニ 見トモ 一
月ニハ

14 見尽スマシキ 間タ 羨ム之ヲ 意也 躑躅ハ 注ニ
アル如ク 羊見「レ」之ヲ 躑躅ト フドル也 故以為
「レ」名耳

15 雪本曰 五渡云々 一句言 崧山五渡溪辺 躑躅映
山 李渤在此中 想可聞鐘陪講筵也 春山——二
句有羨之意也

16 張楷和云 晚山雲尽夕陽紅 隔水時間僧舍鐘 君在
山中應念我 日開幽戸對青峰

17 和云 春滿雲林綠間紅 岳祠風迫遠聞鐘 近来知有
謝公履 應上鷄鳴絶頂峰 【「岳」左傍より書き込み「注
岳即嵩岳也」とある】

18 韓文第三 杏花詩曰 石榴躑躅少シ意思 注 韓曰
本草注 躑躅樹生高三四尺 花似山石榴 或云 一名

山石榴

1111

1 南莊春晚 續翠云 草暖——春 ノトカナル 兒 面

白時分也 吁 アノ去舟ハ 何処へ 行ソ 巴丘ノ方

へ 行ケナ 誰舟

2 ニテカ 有ルラン 沅湘——春ハ 帰レトモ 不販者
アルニ 此舟ハ 販ル人欵 我ハ 不販シテ 又此地
ニテコソ 春ヲ 送スラウ

3 □□ハ 不得志之意也 群玉カ体也 湘妃叟ナケレト
モ 下ニアル欵 一之句ハ 羨也

4 淵云 草暖ハ 蘋香ニテワ ナイ欵 沙長ハ 水緑ニ
テハ ナイ欵 ヨモ 同シ 叟ヲハ スル 先言 春

晩景也 沙長ハ 南

5 莊也 草暖ハ 春晚也 天下ノ 面白処也 風雨之時
ハ 景不面白也 此地ニテ 知人ヲ 送ホトニ 其舟
ヲ 望メハト

6 □□ サカイトモナク 向巴丘也 群玉独留「二」于
此地「一」也 面白処ニ 草暖沙長次第ニ 春帰尽後

ハ 猶々 夏へ 向テ 水緑

7 蘋香シテ 群玉自愁也 一之句 眼前景也 春帰尽テ
ハ 水緑蘋香ランソ

8 補講云 聽雨ハ 水緑蘋香人自愁之句ハ 言護不可陳
処也トテ 一嘯而已

9 微茫—— 一義云 舟已去後 唯有烟浪向巴丘耳

10 雪本 或云 群玉立澧浦望去来之舟 則其水微茫
接巴丘也 沅湘二妃所没之地 今望之 寂々春亦

二 尽矣 故於水緑蘋香之処 懷其人也 傳興詩云 江

草离々江水流 玉人何処捲簾鈎 垂【「興」】「詩」間に

挿入符あり、左傍に「斫」。「傳興斫」にすべき】

12 楊学尽春来瘦 不省人間有別愁 意出此詩

13 沅湘—— 一義云 柳子厚詩云 欲採蘋花不自由之
意也 去舟人ヲ 送ニ セメテ 蘋ヲ 採テ ナリト
モ ヤリタケレ

14 トモ 不自由シテ 自愁耳 此義非也 言ハ春已帰後
沅湘寂々 サルヤ 水ワ ユクヤ ウレシサウニ 緑
ニ 蘋モ【「サ」「ル」間に挿入符あり、「ヤ」右傍に
転倒符ある。「サヤル」にすべき】

15 ウレシサウニナリテ 香也 言得時也 人ハ ツヲ
ク カナシイソ 此義可也 一義云 望去舟ハ 群

玉 黃陵廟【「璧」某字見せ消】

一三三二

1 詩 輕舟短棹唱歌去之意也 吾所思之人ハ 輕舟短棹
ニテ 去ヲ 望テ スコトシテ カナシイソ 沅

湘——思——
2 妃也 所思之人 乘舟去後 春亦暮矣 水緑蘋香処々

独自愁耳 此義尤可也

3 村云 行人去後 群玉獨愁也 村又云 舟ヤ 愁ワ
アワヤ 例ノ 群玉カ 二妃ノ 叟欵

4 望去舟 或云 触目意也 時有去舟向巴丘也 或云

送友人舟也

5 草暖——桃云 巴丘者 長沙也 烟水接長沙也 然則沙長字有味 望去舟 興也 言雖有濟川才 不用之

6 故屈原亦投湘水也 沅湘——如此無知音処ニ 居テ又送春也 水緑蘋香ヲ 見ニツケテモ 愁深也 柳子厚欲採蘋花

7 不自由ノ心ソ 蘋花白 比忠臣明也 子厚嘆 雖薦他才 拳之者 群玉自惜吾才也 春尺テ 蘋ワ 老トモ無「ニ採レ」之以薦者「一」「才」「拳」間に挿入符あり、右傍に「死」。「无拳之者」にすべき。「无(無)」「

8 故云 人自愁也 左傳 蘋蘩蕝藻之菜 行汗黃潦之水 可薦鬼神 可羞王侯 故云 水緑蘋香也

9 李群玉又有南莊春晚詩 新選云 連雲草映一條陂 鸕鶒双々帶水飛 南村小路桃花落 細「選」「云」間に挿入符あり、左傍に「集」。「新選集云」にすべき

10 雨斜風独自帰 幻謂 双々字 独帰字 恐有所感乎 語意可与此詩併案焉

11 草暖——曉風云 此篇以屈原自比 詩以比離騷經 第一句 言以草暖沙長喻小人得処 离騷意也 見去舟 嘆我

12 有經濟之才而不用 第二句 言去舟所向也 第三句 言沅湘寂々 感二女憶三閭 况春尽時哉 第四句 言世間

13 如滄浪濁 沅湘緑者 自比其襟宇潔 蘋香者 比其

德馨也 有才而用 故独自愁而已 人字 群玉自云也 【「而」「用」間に挿入符あり、右傍に「不」。「有才而不用」にすべき】

14 第四應第一 第三應第二 又草暖 沙長 緑水 蘋香 是離騷体 故不為重復也 梅謂 屈原離騷經云

「沅」沅「長」「緑」間に挿入符あり、「水」右傍に 転倒符ある。「水緑」にすべき】

15 湘ヲ以南ニ征兮 就重華而陳詞 王逸注云 言ウレ 依聖王法而行 不「レ」容「レ」レ「二」於俗「一」 故欲度沅 湘之水南行 陳詞自說 誓

16 疑 又屈原湘夫人篇云 沅有芷兮 澧有蘭兮 王逸

注云 沅水之中 有盛■之芷 澧水之外 有芬芳之蘭 異【■某字見せ消、左傍に「茂」。「盛茂」にすべき】

17 於衆草 以興^{ダト}湘夫人美好 亦異「二」於衆人「一」云々 此篇三四用离■九歌 見之 則可也【■某字見せ消、左傍に「騷」。「離騷」にすべき】

18 才子傳 李群玉傳末云 夫澧浦 古騷人之國 屈原 仕遭譖 不知所訴 心煩意乱 賦為離騷 々々 愁也 已矣

19 哉 國人知我兮 又何懷乎故都 委体魚腹 招兮不 来 芳草萎□ 蕭艾參天 奚何一時而然也 群玉継稟

脩【□「サナル」(爾)】

20 能 翱翔大化 人不「レ」知而不「レ」愠 碌不「レ」及而不「レ」言 望「二」涪陽之亡極「一」 挹杜蘭之緒馨

疑君門以披懷 霑一命而潛退 風

21 景滿目 寧無愧古人 故其格調清越 而多登山臨水

懷人送之製 如遠客坐長夜 雨声孤寺秋 請量東

二二三

1 海水 看取淺深愁□句 已曲尽羈旅坎壈之情 壯心千

里於方寸不擾 亦大難矣【□「サナ寺」(等)】

2 本集作豊浦春晚 盖豊州 豊陽縣也 豊浦近沅湘

3 雪本曰 草暖云々 全篇言群玉望人去舟 則其人不

見 而有烟浪向巴丘而已 然我所居之沅湘

4 乃流水寂々 春亦取尽 今雖水綠蘋香 無采以可獻之

人 故獨自愁也

5 子安和云 簑笠归来急繫舟 得魚載酒向林丘 落花滿

眼随流水 蝶与遊蜂相對愁

6 長溪秋思 或作愁字 盖未赴河中之前作也 秋已在河

中 故作愁字可乎 此意無用乎【この行まで「長溪秋思」

原典テキストが置かれてる】

7 幻謂 彦謙在河中者 重榮未亡時也 旧抄非也 幻謂

彦謙想當「二」重榮遇害之後「一」 無「レ」所「レ」托 以

寓「二」章杜之間「一」

8 自「レ」春至「レ」秋 然後赴漢中也 才子傳云 王重榮

表為河中從事 重榮遇害 彦謙貶漢掾中【「漢」「掾」

間に挿入符あり、「中」右傍に転倒符ある。「漢中掾」

にすべき】

9 松月云 柳依々短 莎青々長 水裏々流 皆愁人之具

也 况烟雨中独立溪頭到黄昏 是豈無心者乎

10 雖摩詰□墨之妙 不能寫其万一也 情積乎中 發以

托「レ」物者也 寒鴉——鴉而寒者 尚翼相比去 得

【二前【□「虚*戈」(戲)】】

11 山旧枝之安「一」 人而不「レ」若「二」禽鳥之安「一」

獨立自愁到「二」黄昏時「一」也

12 此詩 王重榮遇害而後 彦謙未為漢中掾前作 則其

情可知矣

13 坡詩十九 孤雲落日西南望 長羨飯鴉自村識【「南」

字右傍より書き込み「指蜀」とある】【「自」「村」間

に挿入符あり、「識」右傍に転倒符ある「自識村」にす

べき】

二三四

1 柳短 彦謙自比才短 莎長比小得意 溪水流比光陰

自流也 雨微比恩澤少 烟暝比時世暗也 寒鴉羨

2 彼有所托也 黄昏比君子処昏乱之朝 身已閑退 無聊

之情 不勝說焉 獨自愁也

3 村云 此義亦可也 柳比君子失時 高騷文選体如此

或云 玉屑第九 有此評詩 幻按 玉屑唯有托物詳

【「此」「評」間に挿入符あり、「詩」右傍に転倒符ある。「有此詩評」にすべき】

4 而無此詩評也

5 補云 長カシカナト 思夕柳ハ 短ク ミタウムナイ

莎ハ 長也 一之句有三重愁 二之句有三重愁也 續

翠云 アマ

6 リノ 更ニ 柳モ アルマイ 莎モ アルマイ 水モ

アルマイカナト 思タレハ アラ 不思議ヤ 柳モ

アリ 莎モ アリ 水モ アル也 雨微——カナシサ

ノ

7 マ、ニ ラモワス シラス 門へ 出テ 独立也

閃々ハ 羽ノ ヒラメクニワ アラス 日影映鴉背シ

テ ヒラメク兒

8 立溪頭待人乎 思人乎 目送帰鳥到黄昏 而独愁者

何也 彦謙乾符末 遇黄巢之乱 憂國離群

9 之情 豈可一也 寒鴉 會誓志 寒鴉 比常鴉頗少

歳十月 自西北来 其陣蔽天 及春【「會誓志」右傍よ

り書き込み「長信宮詩引之 私此出之」とある】

10 中乃去 秦大虚楽 云 寒鴉萬点 流水繞孤村 不

至越者 殆不知【「有」某字見せ消、右傍に「府」】

11 梅溪先生後集第一 鷗寒飢瘦 越多寒鴉 秦少遊詞

寒鴉万点 黄詞 寒鴉如豆 俱得其

12 實 飢燕也 有二種 有胡燕 有越燕

13 長溪秋思 村義云 此詩ハ 秋晚ノ 秋思ニテ 皆

有志ノ 士ノ 遲暮ヲ 嘆スル心アル也 長溪ハ 韋

曲ノ 更也

14 柳短——秋ノ末ノ更ナレハ 長溪ノ景ハ 如此也

雨微——微雨濛々トシテ 烟モ クラキ也 此時分ニ

独立溪

15 頭ニ 人ヲ待ツヤラ 人ヲ思フヤラ 此ノ雨ノフリ

暗ク ナルニ 独リ立ツ也 如此立テ 見レハ 日暮

レハ 寒鴉ハ

16 ヒラメイテ 前ノ山ニ トマリニ 去而已 人ノ

ナクサムルモ ナシ 柳短——雨微——ナル処ニ 物

思イ スカタニ 立テ 独自

17 愁ル也

18 又説云 詩人托「レ」物諷スル也 柳短ハ 君子ハ

不「レ」用シテ カレハツル様ニ 成リ 小人ハ 得

「レ」時ヲ 用レテ 莎ノ 如ク 長スル也 莎ハ

19 ヲカシケナル者也 君子道消 小人道長也 時代モ

ムサノトシテ 暗ク成リ 君ノ恩澤モ ナク 不遍

也 只如我等

20 カ者ハ アナタ ヨナタ 立チサマヨウ也 不「二」

安居「一」也 アラ ウラヤマシヤ 寒鴉ハ 猶 帰ル

処ヲモ 所托ヲ 持ツヨ 我ハ

21 帰隠セウス 処モ ナク 無「レ」所「レ」託シテ 世

ハ 黄昏ニ 末ニ 成ツ 独サマヨウテ 愁也 此義

モ 面白也 文選ノ詩 離騷ノ体ハ 皆如此也 詩ハ

二三五

1 先ツハ 如此モ 作ルヘキ者也

2 雪本日 柳短云々二句 盖託時処也 然第二之句 烟

雨一日所在之事也 言韋杜溪辺 柳自依々短 莎自萎

々

3 長 况雨微烟暝 無一而不愁思也 老杜 腸断春江欲

尽頭 丈藜徐歩立芳州之意也 寒鴉

4 云々二句 言寒鴉乃雖云帰旧栖 我乃失其所 感□可

知也 續々一体詩 孫存吾秋思詩云 鴈落西風【□】リ

*无十木【慨】

5 字々沉 嫩涼偷入藕花心 眼前多少関心事 付与寒蛩

徹夜吟 意相似也

6 和云 試把長鈎放碧□ 水寒魚去拄竿頭 黄芦敗蓼風

蕭瑟 鷗路無也自愁 鷺【「無」「也」間に挿入符あり、

右傍に「聲」。行末に「鷺」あり、「路」は「鷺」か。

7 「鷗鷺無聲也自愁」にすべきか【「□」シ*不】(流)】

7 已前共五首第三句有疊字 或云 純似景物者乎

8 隋宮 煬帝到江都 築街道 植柳千三百里 号隋堤

有二十四橋 白氏長慶集第四 隋堤柳詩云 西【この

行まで数行間「隋宮」原典テキストが置かれている】

9 自黄河東至淮 緑影一千三百里 大業末年春暮月 柳

色如烟絮如雪

10 柳塘——興也 雁弄沙 刘禹錫 旧時王謝堂前燕

飛入尋常百姓家之謂也 續翠云 唐ヲ云ヘキ用ニ 言

隋也

二二六

1 柳モ 如昔 日モ如昔也 内ノ心ハ 言天下衰晚也

二ノ句ハ 塵沙ヲ 吹立兒 処々昏暗 喪乱之象也

2 村云 烟起者 兵乱俄起也 雁弄沙 言隋末英雄各争

奪也 或云 玉屑第九 子美云々 小人貪竊禄位

3 者在朝 故云 君看随陽鴈 各有稻梁謀 然則 鴈言

小人 竊禄也【「梁」は「梁」にすべきか】

4 日西斜不必暮景 咲隠之所謂 愁来白日陰之比也 学

者宜著眼於荒凉之景

5 南康書第五 潘佑上書 極言時政 凡七章不止 有家

国隠々如日将暮之辞 国主悪之

6 煬帝——煬帝ノ 遊シ 故宮アルハカリ也 其旧迹ニ

ハ 草生シテ 人家ヲ ヲクル耳 唐ノ ヲコルモ

可如此也 續翠

7 九渊村菴皆用此義 補云 満【二人】家【一】ノ点ニ

テ 心ハ 上義也

8 煬帝——宮殿廢 則庶民尽家於芳草之間也 又義 壞

宮草木流落於民家也 又云 殿閣多為民所壞 奇【奇(奇)】

9 花異草 亦移種在人家 可謂自己出者反乎己者也 張

芸叟長安覽古詩 沈香亭畔千株石 散【家作假山

【「散■」、「石」字見せ消、右傍に「与」。「■家」、

「散」書きかけ、見せ消、右傍に「人」。「散与人家」

にすべき】【沈(沉)】

10 雪本曰 隋纒三世 三十年耳 史臣云 文帝之開創

既無湯武之仁 而煬帝之繼承 乃有桀紂之惡 雖欲長

世 可

11 乎哉 雪本曰 柳塘云々二句 言煬帝昔到江都

自板渚引河築堤 柳植一千三百株 号之隋堤 架【「堤」

「柳」間に挿入符あり、「植」右傍に転倒符ある。「築

堤 植柳」にすべき】

12 以二十四橋 當春皆 必游幸 車如流水 馬如游雲

也 今則烟起風回 宮殿尺壞 而煬帝所植之琪花【皆

(時)】

13 瑤草 亦散在人家也 瑤 張芸叟長安覽古詩 黃鵠高

飛去不還 百年世更奕暮間 沉香亭——

14 作假山 詩意惟同也 雪本曰 柳塘云々 按隋志

文帝即位 民戸不滿四百万 至于末年 乃踰八百萬

然徒

15 以史筆為能 而不以王政為尚 王通獻太平十二策而

不見用也 煬帝嗣之 恣為淫侈 伐高麗 其兵一

16 百十三萬 大敗而還 於是群雄普起 唐起晉陽 西

取閩陝 推立代王因奪其位 江都之独夫既亡 而群雄

17 之芟刈相繼 然後天下一歸於唐 盖日西斜之語謂之

也

18 雪本曰 玉楼云々 張明達中秋無月詩 春花秋月兩

尤物 不雨即風天斬之 人世悲歎類如此 驪山宮殿草

19 雪本曰 玉楼云々 二句言宮殿半廢 玉楼乃傾 粉

牆乃空 唯有山光依旧如綺而已

20 武帝——云々 二句言明皇一去 美人亦從而終 故

御愛之花亦為野花 而有黃蝶管領春耳 曰玉楼 曰粉

牆 曰【「武帝」は「煬帝」にすべき。原典の三句目に

は「武帝去来紅袖盡」とある】

21 紅袖及黃蝶 皆映綺字用之也 又王建詩云 一院落

花無名醉 半面殘月有鶯啼 意相似也【「面」右傍に「窗

坎」とある。「窗(窗・窓)】

一三七

一 和云 野花芳草石梁斜 潮落長堤鳥篆沙 惆悵日時鶯

与燕 領将春色入誰家 子安

2 綺岫宮 続翠云 此詩為題詠之本 此詩起承轉合 全

備也 村云 唐後宮ト云ヘトモ 詩ニ 武帝ト云ホト

【この行まで数行間「綺岫宮」原典テキストが置かれて
いる】

3 漢武ノ 宮也 全篇漢武ノ叟ヲ 云テ 今ノ玄宗ノ大

者モ 後ニハ 如此ト ソシルン

4 玉楼——蘭講 慈氏云 玉楼ハ傾側シ粉墻ハ空シ点 可

也 玉楼傾側シテ粉墻空之点 不可也 聽雨亦云尔 粉
墻ハ 白ッ 塗ル墻也

5 玉楼 言故宮荒廢也 青山如綺綉以圍繞 而宮在其中

今日似昔者 唯青山耳 松云 昔武帝全盛之

6 時 殿閣巍然 却圍繞青山 今日看之 則只青山重々

露出 則其廢可知矣

7 重疊——杜詩 国破山川在 城春草木深 刘禹錫詩不

改南山色 其餘更々新

8 武帝去^{テ来}ヨリコノカタ——翠云 去来乃武帝去以来也

武帝モ ナク 紅袖モ尽 ホトニ 思モヨラヌ 野花

黄蝶ノ如 小人

9 者共カ 昔ノ 春風ヲ 領スル也 玄宗叟ヲ 作也

一義 昔日紅袖今日無之 其着紅袖人之魂 又化蝶至

此耶

10 應有春魂化為燕 年々飛入未央栖之謂也 綺ハ

カンハタ也 義云 此詩ハ 綺岫 タ々ト 作ル也 【應有春魂化為

燕」句は唐雍裕之「宮人斜」詩に見える】

二三八

1 補云 武帝去来^{セシ}時ノ 紅袖トヨムハ 不可也 昔

美人多而賞花 則蝶亦不来 今日無貴妃 雖有花不賞

2 之 唯花蝶随意 管領春風耳 注直指玄宗為武帝 不

可也 比唐玄宗於漢武帝耳

3 渊云 此詩着題 作綺岫字也 幻謂 玉楼 粉墻 紅

袖 野花 黄蝶 賦「二綺字」「一」青山賦「二岫字

「一」也

4 注 則天称太宗為文皇帝云々 新唐書本紀第二 太宗

文武大聖大廣孝皇帝 諱世民云々 則天称太宗

5 為文皇帝者 非最下一字 盖從亘也 又呂東萊唐驪山

講武記云 以先天元年八月 即皇帝即位 明年

6 改元号開元 始顯听大政 群臣上尊号曰開元神武皇帝

云々 詩人称玄宗帝為武皇帝者 用最

7 下一字也 又新唐書本紀第五 玄宗至道大聖大明孝皇

帝 諱隆基云々 又称玄■帝為明皇帝者 【「宗」字見セ

消】

8 用最下一字也 又鷗陽集古録第六 唐華陽頌跋尾云

玄宗尊号曰聖文神武皇帝

9 資治通鑑唐紀云 太宗 文武大聖大廣孝皇帝 又云

玄宗至道大聖大明孝皇帝

10 某宗 漢書景帝紀云 元年冬十月 詔曰 蓋聞古

ニハ者祖「二有」功「一」而宗トス 「二有德」 「一」注

應劭曰 始取「二天下」 「二」者為祖 高帝

二 称高祖 是也 始治「二天下」 「一」者 為文帝ヲ

称太宗是也 師古曰 應■說非也 祖ハ 始也 始テ受

「レ」命ヲ也 宗ハ 尊也 有「レ」德可「レ」尊 云々

12 丞相臣嘉等 奏曰 云々 臣謹テ議ラク 世一功ハ莫

「レ」大ナル 「二於高皇帝」 「一」 德ハ莫「レ」盛ルハ於

孝文皇帝ヨリ 「一」 高皇帝ノ廟ヲハ宜「レ」為ス 「二帝

13 者 太祖之廟ト 「一」 孝文皇帝 廟宜「レ」為「二」者

太宗之廟ト 云々 制曰可

14 和云 野花狼藉草連空 流水涓々達故宮 輦路榛蕪

樵牧過 滿山落日鳥呼風

15 張楷和 唐音題綺岫作綺綉 和云 燕子年々無樹空

每看遺蝶記行宮 行人莫作繁華想 芳草平原正朔風

二二二九

1 送三藏帰西域 本集題云 三藏将皈西域 就私第夜話

村云 三藏朗公 見耿偉詩 西域人也【この行まで数行

間「送三藏帰西域」原典テキストが置かれている】

2 三藏耿偉詩 所謂朗公也 未詳

3 補云 非玄奘 而亘朗三藏也 雖然朗三藏何人哉 未

審 又帰字 言朗西域人乎 故下帰字 亘朗【「亘」右

傍より書き込み「義乎」とある】

4 与李洞同時人乎 未考 幻按 天隱箋注 三藏朗公

西域人 見耿偉詩

5 淵云 三藏 非天竺人 此題曰帰西域 不審

6 修多羅藏経 毘尼藏律 阿毗曇藏論 依此 行スルヲ

三藏法師ト云フ

7 十萬——桃云 長安城西門 至天竺迎毗羅城東門 十

萬八千里也 今举大数而已 三藏凌遠路帰 則

8 其辛苦不足言焉 流沙葱嶺ト云 難処ヲ 過也 其流

沙ト云フ 沙ヲ 風カ 吹■テ 月モ 口モ アカレ

ヌソ【■「音」字の下半分の「日」を見せ消。「吹立テ」

にすべき】

9 方角ヲモ 不知ホトニ 人カ 路ニ迷ソ 人見タル

シヤレカウヘヲ 取り アツメテ 置テ 其ヲ シル

ヘニ スルソ 今此三藏モ 如

10 玄奘念梵語心経授テ 「レ」龍ニ トヲラレウソ 乍去

ヨイ辛苦ニテ アラウソ 沙中暴風卷沙 或時沙為山

或

二 時為海 須臾多変態 途中實叟也 村云 度天ノ時

ハ 駱駝ヲ ツレテ 行也 無水之沙地ヲ 遠ク 行

也 駱駝能知有水之处 而留也 其時掘地取水也 淵云

彈舌ハ 続翠云 落花陀羅流水持經ト【「落花」右傍より書き込み「無證処」とある】【「羅」「流」間に挿入符あり、右傍に「尼」。「陀羅尼」にすべき】

13 テ 早ヨムト云也 一義ニハ サテハナイソ 一ツ咒ノ中ニ 彈舌コトアリト 云 二義也 続翠云 早ヨム義カ ヨイソ【咒(呪)】

14 心田云 観中ノ ヲシナルハ 流水経卷落花陀羅尼ハ 唐ノ世話也 舌ハヤニ 讀【二】経咒【一】也 彈【レ】舌トハ 是也

二四〇

1 淵云 明朝人詩云 花間彈舌調鸚鵡 月下吹簫引鳳凰 言鸚鵡ハ 自不知人語 舌ヲ 結テ 習

2 教タソ 然則早ヨムテハ ナイソ 幻按 皇明光岳英華集 危進 字伯盟 送友人之七閩憲府詩云

3 花間彈舌云々 月下吹云々

4 旧註曰 沙中 統紀 五印図三云 西北至沙日名疏勒 東南至沮渠 東至于闐 東入砂磧 又東入大流沙【「沙」

「日」間に挿入符あり、右傍に「法」。「至法沙」にすべき】

5 其沙隨風聚散 人多迷路 往來聚遺骸以記

6 又曰五天 即天竺之五印度 謂東西南北中之五印度也

唐玄奘法師西域記 印度者 天竺之正

「名 唐書天竺 居葱嶺南 幅員三万里 分東西南北中五天竺【■「凶」見せ消、右傍に「國」。「天竺國」にすべき】

8 天隱注 思三藏 思宇 恐送字坎 言李洞与三藏話別 到天竺 則路中辛勞可白頭

9 而惜別不眠 到半夜鐘

10 授ク【レ】降龍ニ 授テ降【レ】ス【レ】龍ヲ 授テ降【レ】セシム【レ】

龍ヲ 授レ降【レ】ス【レ】龍ヲ 村云 授テ降【レ】ス【レ】龍ヲ 言ハ

咒ヲ ミテ カケテ 龍ヲ 降スル也 授ク

11 【レ】降龍ニハ 降スル龍ニ 猶咒ヲ ミテ カクル也

補云 降字 降伏 降 他聲也 雖然 降魔 降竜ノ

降 平聲也

12 彼自降伏于我者 平聲乎 不審 幻謂 授ク【二】降【一】

龍ニ【一】 此点可也 授テ降【レ】ス【レ】龍ヲ 此点不可也

降ルハ

13 平聲也 降【レ】スハ 他声也 平声 江韵 乞降 受降

晋文公 退一舍而原降 李陵降【二】匈奴【一】 是也

去声

14 絳韵 貶也 言ハ 彼ヲ伏降スル時ハ 去聲也 彼

カ 降【レ】伏スル時ハ 平聲也【「フ」「伏」間に挿入符あり、「降」右傍に転倒符ある。「彼ヲ降伏スル」にすべき】

15 或曰降字 自伏他「レ」時ハ 平聲也 自「レ」吾降
「レ」物時ハ 它聲也

16 才子傳 崔魯詩 雲生柱礎降龍地 露洗林杏放鶴天

17 十万里トハ 举大教也 其遠路中ニテ ワ イクハ

クノ 災難 ヲソロシキ也 可「レ」多ソ 欲「レ」逃
「二」其難「一」 或流沙

18 葱嶺ナレト 葱嶺ナント／＼ト云処ニテ 沙中ニテ

三蔵 悪鬼毒龍ニ 逢時 彈シテ 「レ」舌ヲ 舌ハヤニ
咒陀羅尼ヲ 誦シ ミテカ

19 ケテ 毒竜ヲ 降伏サスル也 此時ハ 授「レ」咒降ス

ル龍ヲ也 又心ハ 咒トモヲ ミテ 降スル竜ノ 様ナル
物ニ 猶 ミテ

20 カケ／＼スル也 此時ハ 授「二」降竜「一」也

21 五天——補云 天隱注ノ心ハ 三蔵ニ ナルホトノ
者ナレハ ハヤ 年可老也 縦是少年ナリトモ 五天
竺エ 行キツカハ 可白髮

二四一

一也 然間 生前再逢難期 子サメノ 時ハ 鐘ヲチキ
イテ 独イタラハ 偏可「レ」思「二」三蔵也 盖何時最
是思君【「三蔵」のところに「一点」が見えない】

2 処 月入斜窓曉寺鐘之謂也 天隱註ハ 此義也 翫

氏 一義云 注思「二」三蔵「一」 思ノ字恐送ノ字欵【「何
時……曉寺鐘」は元稹「鄂州寓館嚴澗宅」詩に見る句】

3 仰之註云 此詩講者 往々解以為送「二」三蔵「一」之時
夫送人有早發曉行之語者 常之事也 以夜半送行

4 而終篇不及此 何也 又天隱解曰 思三蔵之時也 其
思人之時 必在「二」望前半夜落月之時「一」者 何
也 昼間若

5 初後夜 不思人之義 亦何不注解乎 前之二義 感所
不知也 但解以為「二」話「レ」別之時「一」 雖「レ」不

「レ」切「二」於事「一」 無「レ」害
6 看詩者 且以此義 著意於語外 則餘味當長焉 如愚

案 則是興而比也 三蔵之西帰也 當在途
7 中而経序 然則雖五天 衰徳已極 則利「レ」人之日必

短矣 况生入西域亦不可期乎 然則東震之人【「雖「五」
間に挿入符あり、右傍に「到」。「雖到五天」にすべき】

8 变化之日已少者 如月之半夜而落也 三蔵輟「レ」化而
帰 可以喻也 村云 此義可笑

9 村云 此詩自一二句 至第三句 三蔵所「レ」語也 或
云 李洞向「レ」三蔵所「レ」語也 先三蔵所語ノ義云

一二句 所謂路難ヲ
10 経テ ヤウ／＼ 五天エ 行キツカハ 其辛苦ニ

頭モ 白ク ナルヘシト 語リハツレハ 月落長半夜
鐘ノ 時分也 是義堂ノ義也【「長」「半」間に挿入符
あり、右傍に「安」。「長安半夜鐘」にすべき】
二 天隠注不可也 應白頭三字 作頭應白也 天隠註本ニ
如「レ」此也

12 続翠講云 第一二句 所謂道中辛苦ニテハ 頭モ
白ク ナライテハト 話タレハ ハヤ 夜カ 明テ
月落鐘鳴ホトニ 起テ

13 行ク也 第三句マテワ 所「レ」話也 第四句ハ 所
「二」話了「二」也 此義勝天隠註也

14 補云 村云 慈氏義ハ 玉屑所載之詩村云李ノ■也
別來滄海吏 語罷暮天鐘之意也 五天到日應頭白ト云
マテ【■某二字見せ消、左傍に「益詩」。「益詩也」
にすべき】

15 語也 如此相語時ニ 半夜鐘ヲ 撞ホトニ 今チト
ナリトモ 應語也 夜半鐘声到客舫ト トカメタソ
近人詩云 風吹【「云」「風」間に挿入符あり、右傍に
「天」。「天風吹落」にすべき】

16 落土峯雪 長安寺中鐘一声之類也 續翠モ 引此詩
也 言ハ 行人ハ 土峯雪ノ 面白処ヲ 可透ト 今
相語時【「安」右傍に「樂」。「長樂寺」ともいう意か】
17 分ハ 長樂寺中鐘一声也 續翠云 慈氏義勝天隠註
也 補又云 仰之義 雖有一理 不如両義也 村同翠

之義

18 黙亦然 村云 月落——四ノ句ハ 村云 此詩ノ
一ヨリ 二カラ 三ニ 到テ 三ト四ノ句ノ 續キハワ
古歌有此法云

19 思フ吏ナト 問フ人ノ ナカルラン アラケハソ
ラニ 月ソ サエケキ 此句法アルソト 蘭講第四句
言惜別以欲夜長

20 則月不曙而落 鐘半夜而鳴 実可恨者也 第一二三
句 乃夜話也

21 桃抄云 一義 三蔵到五天日 吾頭已應白 長安落
月鐘鳴時 可記今夜話別之吏也 愚意ナラハ ナセニ
應白髮

二四二

一 ソト云へハ 月落鐘鳴時 可思三蔵之謂也 月入斜窓

暁寺鐘ノ心也 幻謂 放翁云 不許今年頭不白【二四一
元稹詩に見える句】

2 城楼残角寺楼鐘

3 晚樵子後藤云 漁菴説ニハ 第一二三句マテハ 李洞
留三蔵也 為出家者 処々家山 何必凌遠路 帰天竺

哉 若

4 到天竺已應白頭 接物利生無幾日 只須相留 若フツ
ト 不可留ニテ アラハ ハヤトク 御タチアレ 月

落半夜鐘

- 5 鳴ッサウハ ト云ソ 此モ 面白トモ 送人ニワ イヤ也 愚カ 心ナラハ 留テ ヲイテ 第四句テモ 曉ナレトモ 今一夜ノ吏ナレハ 名
- 6 残惜サノ 餘ニ ナウマタ 此鐘ハ 半夜鐘ニテ サウモノヲ 何トテ 御イソキ サウト 云テ 袖ニ トリツイテ 留ムルト 見
- 7 タラハ 好坎 与楓橋詩 半夜鐘 同意也 古本 頭在應字上
- 8 雪本曰 十万云々二句言 自長安城西門 至于西印度 迎毘羅城十万八千里也 今朗三藏 如契公誦心經 可授深沙■王也【「玉」見せ消】
- 9 又曰 五天云々 二句言 三藏到西域 来皈不可期 故今宵一刻 亦要永々 然半夜月落鐘鳴 不勝其情 可知也 東坡
- 10 云 花有清香月有陰 春宵一刻價千金 意相同
- 11 樵本曰 村云 三藏自西域来 将帰西域 而与李洞 話其皈程時 月落鐘鳴也 注亦不是 仰之譬喻之義 甚可笑
- 12 雪樵本曰 月落云々 詩粹言 思三藏之時 月落于西 自夜半至曉 思君不忘也 此義非也 查住云 講者 往々解以為送三
- 13 藏之時 夫送人或自行 有早發曉行之語者 常之事

也 以夜半送行 必有可謂 而終篇不及此 請以其謂見

14 教焉 天隱解曰 思三藏之時也 思人之時 必在望

前半夜落月之時者 何乎 晝間若初後夜 不思人之義

又【晝(昼)】

15 何不注解也 前二義 皆所不知 但解以為話別之時

雖不切於事 不妨看者 云々 見于前 至以喻矣【「者」

左下に×印あり、「至以喻矣」左傍に同様な印が見える。

「不妨看者 至以喻矣 云々」にすべきか【但(但)】

16 樵本曰 詩話總龜云 詩之作也 窮通之分可觀 王建寒碎 故仕終不頭 李洞詩窮碎 故竟不第 韋莊詩

壯

17 故至台輔 云々 葉杵声中搗殘■夢 茶鐘影裡□孤

灯 則李洞詩也 又曰 李洞家貧 吟極苦 至廢寢食

【□「者+火」(煮)】

18 酷慕賈長江 遂銅寫島像 戴之巾中 常持数珠 念

賈島佛 一日千遍 人有喜賈島者 洞必手録嶋詩贈之

叮嚀

19 再四 曰 此無異佛經 皈焚香拜之 其仰慕一何如

此之切也 洞詩云 殘陽高照蜀 敗葉遠浮涇 又馬飢

潦落

20 葉 鶴病曬殘陽 又卷箔溪月 敲松紫閣書【「箔」「溪」

間に挿入符あり、右傍に「清」。「卷箔清溪月」にすべ

【曬(晒)】

- 21 雪本曰 案慈恩傳云 五峰外行于西南八月 是流河上無飛禽 下絶走獸 沙細如麵 有神名 深沙大将 為一閻

二四三

- 1 浮鬼 云々 又曰至沙河間 逢諸惡鬼 奇状口類 遶人前後 雖念觀音 不能全去 及誦心經 發聲皆【口「已十共」(異)】
- 2 散 又覽空華日用集云 余過中山処 出玄奘取經之因 三卷 盖世俗好吏 綺語也 今所謂驛公十生度
- 3 天竺 即此書所載也 其引路者曰 猪八戒チヨウハツ 孫行者 沙和尚 々々即鬼神也 以骷髏九个示玄奘云 你前身 九度々天竺 皆被害 吾食即其驗也 今十生 云々 愚謂 用之 第二句則可欤
- 5 和云 隻履西帰礼大雄 獨持祖鉢引蒼龍 雲飛五印三千界 夜聴于闐霜後鐘 闐子安【界(界)】
- 6 雪樵本曰 明皇楊妃 唐楊妃夢与明皇遊山驪 至興元驛 方对食 後宮忽告火發 倉卒出驛【「遊」「山」間に挿入符あり、「驪」右傍に転倒符ある。「遊驪山」にすべき】 【「唐楊妃夢与明皇遊山驪」より以下 16 行まで『類説』に原文が見える】
- 7 回望 高木俱為烈焰 俄有二龍 帝跨白龍 其去若飛

妃跨黒龍 其行甚緩 左右無人 維一蓬頭黒

- 8 一面物 兒不類人 望帝去甚遠 触一危峰 沉烟靄中 開目則獨在一室 黒面物曰 某此峯神也 有一騎
- 9 来受妃益州牧蚕元后 條然夢覺 翌日 漁陽叛書至 馬嵬縊妃子死 帝曰 夢今應矣 与■朕【「勝」某字見 世消】【條(條)】
- 10 遊驪山 驪与離同 方■食 火發 失食之兆 火 兵氣也 驛木俱焚 驛与易同 加木於旁 楊字
- 11 也 吾跨白龍 西游之象 彼跨黒龍 陰暗之理 獨行無左右之助 一騎 馬也 峰神乃鬼也 果死於馬嵬
- 12 乎 當授益州養蚕元后 養蚕 所以致絲也 益旁加 絲 縊字也 帝后夢至一处 題曰東虚府 又至一院 題
- 13 曰太一玉妃真元上妃院 入見太真 隔一雲母屏 坐不見其形 帝曰 汝思吾乎 妃曰 人非木石 安
- 14 得無情 異日當共跨暗暉浮落景 遊玉虚中 帝曰 碧海無涯 仙山路絶 何計通耗 妃曰 若遇雁
- 15 府上人 可附信矣 帝既□ 作詩曰 風急雲驚雨不成 □来仙夢甚分明 當時苦恨銀屏影 遮【□「文十見」(覚)】
- 16 隔仙妃抵聴聲 后思雁府上人之言 果有鴻都道士於海上仙峰 得鈿合 私言而廻

二四四

已上共三首

一 桃云 或第三句不喚 而第四句申其意者之格也 趙瞻

民云 第三与第四 啐啄出結也 同前解也 如心云

第四以

二 即刻即景結之 天隱注第三句皆如是 則聚為一類 然

則不干^{ツカ}第四句之事乎 雖然天隱又曰 或第三

三 句喚第四句者 或不喚而第四句申其意者 由是觀之

第四句非不相干^{ツカ}也 或云 景物中有人者

〈表1〉先に異体字を置き、その後の()の内に通行体を入れる。ただ、操作難なため、一部ユニコードには文字がないものも割愛した。

醫(医)	烟(煙)	淵(淵)	徃(往)	華(華)
界(界)	會(会)	盖(蓋)	廻(廻)	鴈(雁)
竒(奇)	氣(氣)	歧(岐)	弃(棄)	亘(宜)
虚(虚)	京(京)	况(況)	溪(溪)	替(稽)
區(区)	縣(県)	嚴(嚴)	俟(候)	號(号)
國(国)	曬(晒)	碎(碎)	參(參)	尔(爾)
峯(時)	實(実)	咒(呪)	脩(修)	從(從)
嘗(嘗)	巢(巢)	粹(粹)	翠(翠)	至(聖)
節(節)	迂(遷)	巾(草)	續(続)	蚌(契)

帶(帶)	臺(台)	但(但)	團(団)	遲(遅)
晝(昼)	腸(腸)	沈(沉)	轉(転)	傳(伝)
荅(答)	當(当)	德(徳)	獨(独)	讀(読)
柰(奈)	發(発)	廢(廢)	麥(麦)	厠(廟)
俛(俯)	并(並)	徧(偏)	篇(篇)	峯(峰)
兒(貌)	寶(宝)	牙(無)	餘(余)	坎(敷)
离(離)	刘(劉)	兩(両)	凉(涼)	灵(靈)
勻・韵(韻)	爭・叟(事)	寫・寫(写)	條然(條然)	會(會)
疊・疊(疊)	窗(窗・窓)	隋堤(隋堤)	會(會)	會(會)

〈表2〉行末の【】中に「米*口」(幽)や「尺+日」(書)

のように記す異体字の、その通行体すなわち()内の

文字「幽」や「書」を一覧した。

*印の類：還 既 騎 戲 声 辺 幽 翼 流 盧

+印の類：愛 異 恩 宜(亘) 薺 書 煮 樵 食 蕊

声 定 等 夢 桃 様

*印と+印の組み合わせた類：概 講

〈表3〉表2のように工夫しても再現できなかった異体字の、その通行体の文字を一覧した。

印員 隱 陰 過 歌 回 懷 害 隔 画 畫 閑
看 既 鬼 就 舉 興 繞 玉 兼 卷 形 經 嚴

魂 左 再 絲 糸 爾 尔 修 受 承 将 墙 賞
襄 踵 凶 衰 垂 嵩 雖 說 葱 象 奪 第 段
嘆 置 躑 土 統 微 壁 暮 面 踰 尤 陵 流
龍 臨 留 盧

〔付記〕本稿は 2016 年度中華人民共和国国家社会科学基金項目資助（一般項目／項目号 16BZW062）を得たものであり、その研究成果の一部とする。特記して感謝を申し上げます。

リュウ レイ／北京師範大学外国語言文学学院 教授

（二〇一八年一〇月二二日受理）